世事百談

1 5
1636
3

門 イ6
號 1636
巻 3

昭和42年12月20日寄贈
原安三郎

京都帝國大學圖書

世事百談巻之四目録

松竹梅
九尾狐
マろ貝
頻伽鳥
木中ヶ佛像あらハる
清正ハ朝鮮へ渡
赤國
潭帳を砲石とす
一殘切
津輕笛
梅ヶ嘗
子飼の虎
山猫
旃檀ハ二葉より香
菁を彩燈ヶつくて裏陣こと
清心顎月の旗
僧日遥の侍
書幅ヶて獄を拭ヶ
小児の詩
拷人形
亂のあ入

箱入娘　銭樹子

抱餅

海嵐

手綱染

四十二物あるべし

金畫殘　たのもし

通り悪魔の怪異

足袋書

懸物　引墨

原稿百條今又やすらんためかいつるべし

今世あるひとかたちて百三十八條とす

竹のうんぜん

牡丹餅　萩の花

すをきとある

文七元結

起請

貸税

結書茅を云ふべし

和歌子郎を押

若学

世事百談巻之四

松竹梅

松竹梅を吾邦は慶賀のもの也、唐土にては歳寒三友

こゝろとし月今廣義は、菖蒲の恒言は、葛亦詩話は世俗の恒言は

して賦咏ふ題ること稀れ、高士奇が金鼇退食筆記に、

五龍亭鶩為左素厳創于明天順年在左液池西菊

向後有草亭画松竹梅于上曰歳寒門、まさ元張伯

淳題自甫松竹梅図詩あり曰三友亭と歳晩時政縁

冷落易相知、何須近舍今皇甫加向図中覓補之、元

詩二集養蒙先生集は出づとゝ、程ふ〻〻元次

山丐論は、古人郷無君子則与山水為友里無君子

則以松竹為友坐無君子則以琴酒為友東坡詩ニ、
風泉雨部樂松竹三益友と云こと、陵餘叢考歳寒三
友は條さ云う、唐の李邕が題画竹詩ニ、對雪凍窩酌酒
敲氷煖閣煮茶醉義熙童展畫咲題松竹梅花とあり

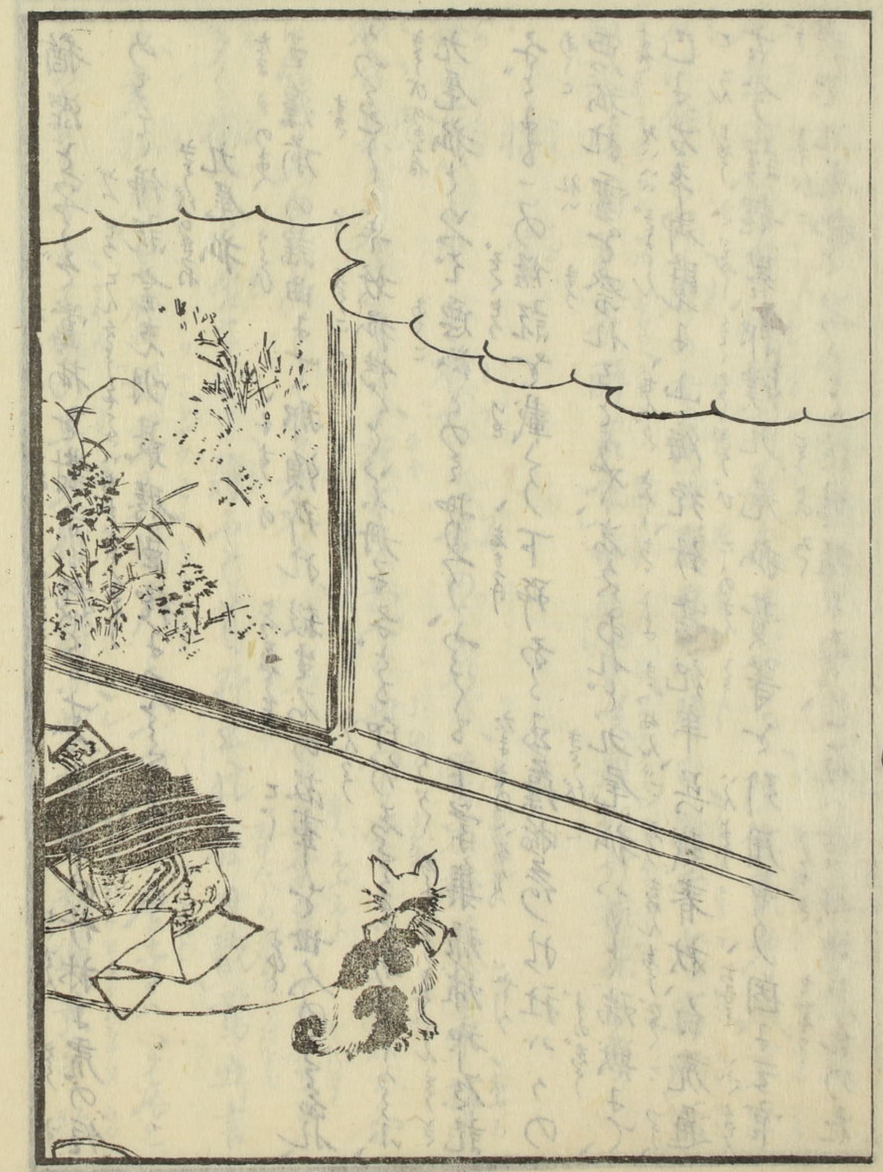
梅ニ鶯

梅ニ鶯をよめるとは、和ニ
和ニ集ニ見えたり、梅ニ鶯と云ふ梅は、
らんぜあるべきかの〳〵も世ニ、こと〳〵も萬葉集ニ鶯ハ
多く梅をよゝ云せり、詩ニも葛邪王が春日歌鶯五言
ニ、素梅開素齋嬌鶯美嬌声とのふ句あり、唐ニ、ハ、
とのゝおりうニ王維の早春行の詩ニ、紫梅發初遍黄鶯歌

猶澀とのゝ云ふ梅を對する樓ニ、まゝ竹林ニ虎の住
めるとゝ佛說金光明最勝王經ニ見えたり、

九尾狐

玉藻前の謠曲ニて那須野が殺生石の故事を世人のきゝ慣れ
たるゝ〳〵年妖狐化とゝふ冊子ども印行あるゝとあり〳〵ふ、
九尾狐と云ふは悪狐とのゝ世ニ下学集琉球神乃託
子どもこの俗說を載せり、下野ニ玉藻稲荷の社ハうの
悪狐が霊を祭れるとゝや、ゝ久あれど九尾狐ハもと瑞獸ニて、
已ニ古本御覽ニ、山海經ニ、竹書紀年、呉越春秋、白虎通
古今注、魏畧、郭璞九尾狐賛等を引用せり、因ニ云ふ官
妓を九尾狐と云ふは侯鯖録ニあり、これハ官妓の声色のた



めよ人の盡惑やらるを孤よ魅さるを嘗てあざむく、

手負の虎　山猫

虎と猫とハ大小剛柔ハたゞ殊なるとゝぐるゝ形狀のお類すらも絶てよく似ざれバ互ひ邦の内人猫を手負ひ虎といふなり、古今ふ帳の哥ふ

あさぢふ社小野の古社柔いるれバ手びの子のみ和れる

あさ源氏物語女三宮のそうよ見ゝる、唐土の小說ふ虎を山猫といふと、西遊記第十三回鶻虎六金星解厄といふ條ふ、伯欽道風嶋見個山猫来了云ゝ只見一隻斑斕虎

とあり、形似たりて互ふ異名とすゝて押りあくおびゝる、

とり貝

鳥貝ハ赤貝ふ似て殼薄く貝の表ふ赤ゝ丹塗の宮津まく

蒼碗貝と云ゝ、肉ふ多くふ似く色黄赤ゝ正二月ふ社肉を酢ふ浸して京師ふ切り賣ゝり、この貝唱ふ化す四多ふ多見と

あづゝと介品ふ云ゝ江戸ふて夏ふ鮓ふ製し

鬻くゝれど味ふ美くゝ、上総の國人ハ海上ふ千

鳥と云ふ鳥多くあくふ多社水ふ入り化して見ゝるれど

鳥貝と云ふ鳥ふ化して見ゝるハこの故なり、伊

勢のあくより廻船の舟人船ゝりの子ゝ貝を拾て食料と

すゝ、そハ價のと外ふ安きあるゆゑなゝ、ふ社貝を去て肉を見

るふ鳥の形あると云ゝ、ふれハ鳥貝といふハいづれの見ふて名を

山せしまゝ赤ぶ赤ひ云ゝ、赤ふれども月今ふ雀の化して蛤と

あるとあるを切りハバ鳥北見ず化すゝ芝がまあるぐや、

栴檀ハ二葉より香　頻伽鳥

栴檀ハ二葉より香といふハ佛説ず出て吉邪ずもゝ〳〵ひあ
る譬あり、觀佛三昧海經ず牛頭栴檀生伊蘭叢中未
又長大在地下時茅茎枝葉如蘭浮提竹筍之伸枝
滿月卒後地出成栴檀樹衆皆用牛頭栴檀上妙之
香永無伊蘭臭悪之氣と〳〵ゝ撰集抄ず、ぢんえハ二
葉ずりかんばしく、梅花ハつぼるず香あり、まさ宝物集ず、紫
ハ伊蘭といふ樹あり、その香臭くして一枝一葉を嗅ぐず狂
醉臥して死門ず〳〵其伊蘭四十里北間ず生茂らん中ず、栴
檀といふ樹ゝ其中ふ生出て未ざ二葉ず及ばざして、葉の角ぐ

りかんが香芳くして伊蘭北臭気を消し失ふ、まさ源
平盛衰記ず、栴檀ハ二葉より芳くして四十里の伊蘭林を
翔し、頻伽ハ卵の中ずくあれども其声諸鳥小勝ゝうと
足〳〵、因ず云、頻伽ハまさハ訶陵頻伽鳥ゝいう、翻訳名
義集ずハ訶陵頻伽を妙音と訳したるハ義訳ずて、まさ訶
陵を美妙、頻伽を音声と訳するもあれど、ゝるず誤りず
て正しゝ〳〵、切りず唐書ず、訶陵國ず重頻伽ハを貢するよ
しあれバ、訶陵ハ國の名ずて明らかず、頻伽ハ鳥とのふことの
梵語あり、その譬ハ十誦律ず頻迦軍持とあるを、南海寄歸
伝ず鳥頸瓶と訳してゝゝ切りぶ〳〵、ゝもバ訶陵頻
伽ハ訶陵國ず産する鳥といふとあるを、その声北〳〵ゝけ

まバ音声のゆゑよ詳しくるとぞ、

菁を行燈ふつて悪除とす

物類相感志よ、三月三日收菓花置燈祭上則飛蛾

敗畏不投とあるハ豊邦のあるハ小四月八日菁を

ろ〳〵行燈よつて盂て畏ずとするよ似ろ、

木中よ佛像あるハ

文政己丑の夏、筆者ある多宮院とふ真言宗の寺まて、樫の

木をきりしをれあるハ、その木れきり口よ佛像の彫ぎきく

るどく現れあるをしバ人ろ奇異の思ひをなし、日を経るよ

ありよろめく世まあねくきをえされバ、の佛像よまもつるめハ

と多ろ〳〵、ろ〳〵き紀事および佛像の寫真ハ予ガ随掃篇よ載

たれバ一ろよ考ふべ、曠園雑志よ有拘樹大十一抱圍以其

堅重雖斧鋸而折之、中有觀音大士像極其端好、崖

石水仏重子鸚鵡之影纖細備具儼若圖畫此面呼

有合之彼面無亦少別と云ふ〳〵木中よ文字あるとハ和

漢よ多れたり、あるく多づ〳〵ねど、仏像画図の現とハと

稱ふ考ふとうるめ、ふ子木れ浪の深こて自文字畫図を為

ハ、木中よ文字あり〳〵ことハ、述異記南陽雑俎夢渓筆談

春渚紀聞地誌豊邦の國史今物語砂石集佛書よハ宝積

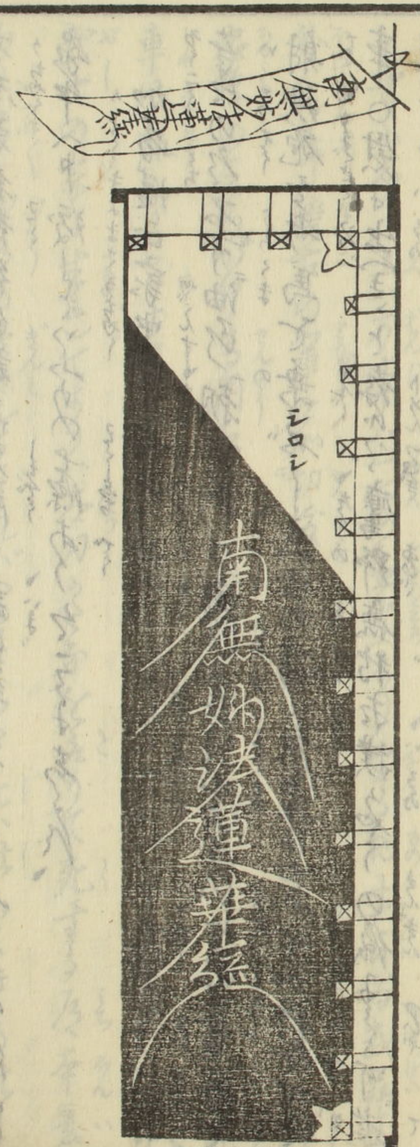
経をどるも見え、折たく柴れ記俗説辨ふ論あり、人ち多り〳〵

てるれバ一ろよ〳〵ば、

清正顕日れ旗

加藤清正の朝鮮國へ渡海のとき題目の旗をたてゝ征伐せしゝ
いふと、児童迄も話柄とすることあり、それ事実のぶしゝものゝ
ようなるハ清正記より、加藤より小南無妙法蓮華経の御旗をぞ
たまふ、その旗ハ秀吉公播磨國拜領のとき信長公より授
したまふ吉例よまうせてゝたまはるとあり、右よりゝ
おりハ、ことゝより加藤清正ハ日蓮宗よりて、信仰もあつかれ
ハ、とさゝより題目の旗を賜ちゝ、されハその宗つま
て清正公大神俗ぎゝ仰ぎまつれるも尚敬ふきよハあゝず、それ
旗の縮図諸国旗旗國とゝるものゝ載せゝ、それのこゝあゝず
南瓜川ゝ妙國寺まも加藤清正ハ自筆ゝて題目の指
物ありときゝ、

加藤肥後守



加藤清正ハ世よきこゝろ文武兼備ハ名ゝ、その伝記ハ木村
又義の著ゝ清正記といふものあり、いと中き証拠あり、印

本よハ續撰清正記ニ云ヒのあり、世よハ大ハ續撰のこ所ハ記ハ写
本中ハ伝ハ清正記を考る人ハ〻この外清正の事ハ記ハ〻ハ
太閤記朝鮮征伐記高麗陣日記の類ハ多〻〻さて清正の
家中へハ渡しとハ〻ハ際あるべ〻ハ、

加藤清正家中へハ渡七ヶ條

一清正の乃ハ不可油断朝寅刻ハ起〻〻兵法を学ひ食を喰ふを
射撃馬を乗〻〻武士の嗜ハ能者ハ別て加恪を可
事、○慰ハ出べきと存ハ〻ハ鷹野鹿狩相撲ハ〻の後ハ〻可慰
山事、○衣類の事ハ絹紬用たゞ〻ハ衣類ハ金銀を費〻ハ
ハ不成ハ中ハ曲事ハ武士ハ身上ハ応ハ武具を嗜人を可
扶持軍用の時ハ金銀を〻ハ〻ハ、○平生傷軍つきあひ者一人事

主の外咄ハまゞ〻ハ食ハ黒飯たゞ〻但武芸熟練の時ハ多人
数ハ有ハ事、○軍礼法ハ〻ハ不ハ事ハ美服を好む
者ハ曲事、○乱舞方一図ハ心ハ刀を取れハ人を切ん
と思ふ者ハ上ハ万事ハ一心の芸ハ文ハ生ハ和ハ武芸の
外乱舞謡ハ小軍ハ切腹事、○学文の事ハ入精ハ孝を読
忠孝のこゝろ〻ハ詩聯句ハ〻ハ作ハ心ハ花
車風流ハ〻ハ女のやうハ成ハ武士
武士の家ハ生ハ〻ハ刀ハ〻ハ死ハ〻ハ本意
ハ事ハ武ハ〻ハ作ハ死ハ仕ハ
ていハ〻心を武ハ肝要の事、
右之條〻書夜可相守、若右之ヶ条雖勤ハ存軍ハ有ハ者、

服を可申速に遂吟味、男道不成者之印を付可追放事不可有疑仍如件　加藤主計頭清正在判　佐甲

傳日蓮伝

肥後の本妙寺開三代日蓮上人とゝ申ふは、朝鮮國の人なり、夫婦二年豊太閤朝鮮征伐の時、加藤總大将にて彼地を攻る、びけ、凱旋のときまゝ〳〵後洞に普賢庵にてひとりの小児の居るを見て、名を何と問ふに、何とも名のいはず、やがて筆とりて、獨上寒山石徑斜、白雲生處有人家、とかきすてゝ、それ時児の年十歳なり、清正これを見て寄児あること珍しく、是邦へつれ来り生長の後天資俊利にして書をもよくす、仏門に入り名を日蓮と云、これ即本妙寺の三代なり、清正此没後も毎年香花の手向を怠らざるゝ、とゝ云、本化別頭佛祖伝に清正の蓮宗を信ずることはあつきに出るゝ、先年、法子幸龍寺に京師妙満寺の開祖あり〳〵、その霊宝と多〳〵中に、この日遥ゞ真蹟に題目あり、その筆體尋常なるゝ、友人南部蓑刻して同好に贈れり、

赤國

豊太閤朝鮮征伐の時、彼地にて赤國書國とゝ云とあり、豊太閤軍令に、赤國のゝゝ一人も成敗やつてはなるまじとゝ、豊太閤記朝鮮征伐記にも此詞とゝ、蜜ずるに舊聞記に、今是赤國征伐のとは太閤の

命有まあらぐ諸軍の私ゑ起るとぞ陳ぐ侯る、此赤國とい
ふハ晋初の王彩り、朝鮮の縹國をねてうゝて古周の殷あ
るよ國くを五色ハ色よ彩りるけて歴殷よ安ゝゝむ、元北
晋初をバ赤色よ彩りるけて歴殷よ安ゝゝむ、元北
赤國のるけあきゝうよ、

書幅よて織を拭ふ　潭帖を砲石ゝ

甲乙剰言よ、劉玄子後朝鮮還言、彼中書集多中國
所無者且刻本精良無一字不倣趙文敏惜為倭奴
殘毀至圓潤之間往往以書幅拭織ふ典籍一大厄
會也とあり、まゝ三韓紀畧よ、西韓之士編著素縉今
播上國者皆壬辰所傳ゝどもゝバ、の國北書籍異物

ゝるふ多くこの附よ分捕ゝ来れるゝゝゝ、まゝ洞天清
祿集よ、淳化閣帖既須行潭州即摸刻二本謂之潭
帖、余嘗見其初本當与舊絳帖雁行至慶歴八年石
已殘缺、永州傳希白重摸東坡猶嘉其有晋人風度、
建炎虜騎至長沙、守城者以為砲石無一存者紹興
初年三次重摸失真遠矣とゝり、吾邦まも弘法大師の益
田池の碑を毀て城塁乃石垣とゝるゝ類ふゝ、唐土ハもゝゝ北
毀まて古書のゝるゝるめの報ふゝまいるゝあゝゝ、吾邦も安ゝの火
應仁の乱ゝてまゝゝまき典籍の一大厄ゝれ、

小児の詩

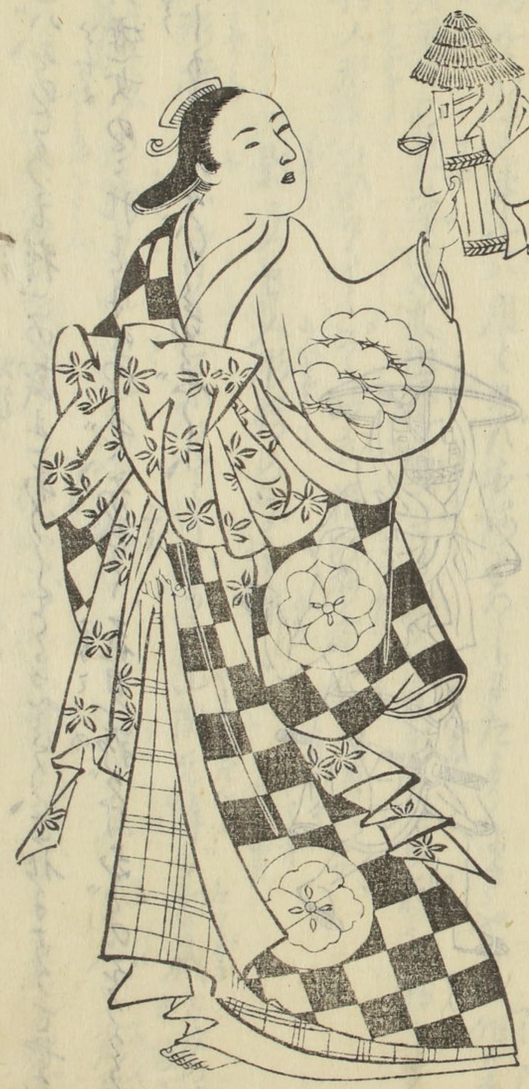
童蒙先習よやさゝきゝるのと、ゝる條よ、初朝文祿の頃ゝい

兵をつゝ〳〵異國を拙び出でとあり〳〵とき、人を多くして帰朝せ
しゆ中ふ七歳の児ありしが孟多裏分明帰故郷、雙親向我
問扶桑華鯤接上一声響、撫枕猶疑在大唐とぞ作
星〳〵寒ふやさ〳〵ともあれまるとあり、この事ハ已
ま乗棟孫まもあるして世人またまく語拙こせり、狂これより
やゝ〳〵絶くよく似ることあり、卧雲日件録ま、寛正五年二
月廿三日、壽向来請雲州海賊侵大明投西小児来
兄七歳作詩曰異國更無青眼友空江孤看白鴎羣
秋風洒淚三千里、吹滿西山日暮雲、茅六歳ハ作詩
曰煙水微茫帰路□、流波万里在他郷、与人欲語語
音別終日無言送夕陽、吁在此方則ハ十ハ翁亦道

不得乎とぞ云ふ、二書ま載る小児の詩を誦するこれあ
まるを想像すれバ実ま酸鼻するま堪ふ、

一銭切

信長記ま、信長卿八清水寺ふ在くなるゝ、洛中洛外ま於く上
下こぞりがたき軍あるバ一銭切と御定めありてとゝふことを
云ふ、この一銭切ま、清正記ま載る高麗軍中
北制札ま、軍勢於味方地乱妨狼藉軍ハ為一銭切事あ
ま、あさ上総國望陀郡真里谷村ま天寧寺真如寺と云
上総國曹洞派總禄のちあり、ゝ寺の門前ま禁榜ありて、條
目の文ふ門前百姓於非法有之者可為一銭切事ふぞ
あり、ゝ云ふまよりて考るま、戦國の時ハ刑名と又ゝ、この一



磔切の義詳かなるべし、讀史餘論は豊太閤のことを云る條
に、二つさハ此人車法よりく一銭切とらるゝことを始めらるゝたゝ
ハ一銭を盗みたるもの死刑まあり、刑罪既に重くあるべ、重
罪の輩をハ或ハ切腹或ハ斬罪獄門まうけ、そうつけ次あり
そゞ言刑出来たりといつて、これまて一銭切の義多明ありとらふ
べし、

格人形

ある人の説に、延宝天和の頃はやり浮世絵を見
しに、その切りむき遊女はでき女の小き格子に衣をうちかけ編
笠をきせたり、切りかな宴ごとの席まての姿をもれなく遊
女のりてあそびとのこと世ひしに、

宝暦七年の印章より、絵本揚巻と云ふ冊子まこてに載図あ
まバそのころも粧こゝの戯まこあるゝとゝろ、これまのりて知も
へバ遊女のうれとまのあるべ、あるゝ花見踊りのをゝゝ
興じもくあそびしるゝ、

ある日柳亭羅よ、この揚人形のやゝをゝを、羅ゝゝ一老
人の語よむゝ人形揚とゝのゝあり、孫遊をゝよ持行とき

ゝくさやうのゝれよ包名ばその形未保よ似ゝをゆてあを
肩せゝゝ、さてその揚よ市見れ小袖まゝ小羽織をゝおきせ、人
形廻しの劇れを示ゝゝゝづつひよひろれ遊戯とゝりて、ゝゝゝ
内をいゝゝ事をバ用くせば、ゝ保まゝしたりよきやゝよ似ゝ花
見幕の内をゝて是を畑ゝすゝあり、人形揚の詞を結ゝゝ
揚人形とゝのゝゝゝ、西武撰の砂金袋 明暦三年印章 よ、
影ゝゝせ人形揚のゝゝゝ餅 康重
人形揚の名ハゝゝゝゝゝゝ、ゝゝ山岡元隣ゝ宝蔵 万治の印章後よ
幸義と名の花見れ事をゝゝ傳よ、ゝゝゝ行きゝゝゝ人の人形揚
よつめ懐年書よをゝめゝ、花ハゝれれ情よゝゝゝゝゝゝゝゝ
もゝゝゝゝゝゝゝ顔つきも実よ春ゝを春ゝれやとあり、

これらまて人形まハ〳〵ハ用ひ〳〵とハいそぐれど人形打の名ハ
あ〳〵とすぐ〳〵、まく桃まゝ俳諧次第延宝九年撰より、

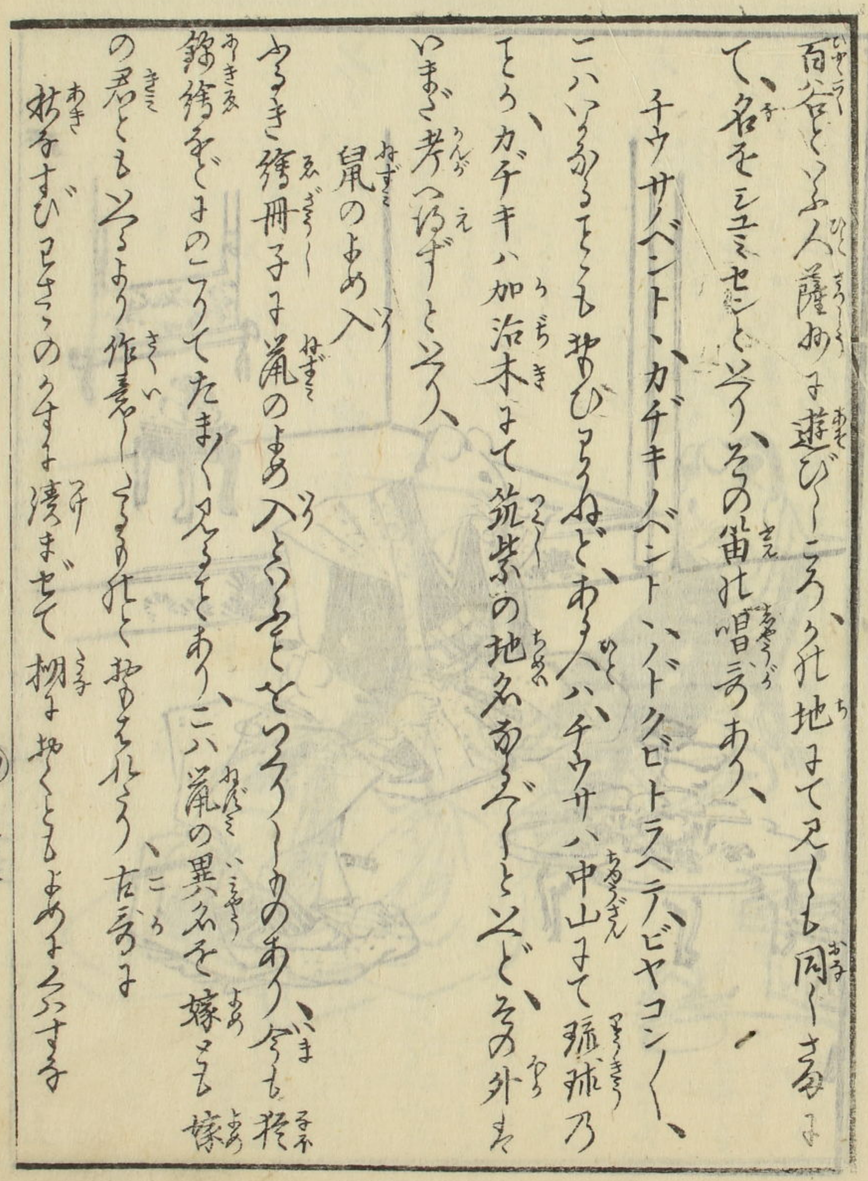
前　樂やつこうなれて風流拍とよふ其角

附　打よ羽おりをきせ〳〵あふぎ〳〵　桃青

この句ハ打を人形ゝ〳〵まハるものあり久、

律軽笛

文政甲申の秋、児童のびやゞんといふ鉄もて造りし笛を
散ぐさの行すれ〳〵ゝ、その笛ハ竹をもてこめて造りゝ
たゝものよハあらゞ、むゝ〳〵より竜地をゞよハあてあそび〳〵めとゞ、
翠軒翁筆記ゝ、ホヤコンといふもの薩州より吹物神事ゝ用
小岩城ハ情ゝもあり、



打形ゝ〳〵の如〳〵、又関東陽話ゝ

百谷と云人薩州ゝ遊び〳〵こゝ久ゝ地ゝて足〳〵も同〳〵さ有ゝ
て、名を三三セと云ゝ、その笛ハ唱ゝ有ゝ、

チウサベント、カヂキノベント、ハドクビトラヘテ、ビヤコン〳〵、
こハ〳〵ゝ有ゝもゝ世びゝ
とゝ、カヂキハ加治木ゝて
ねどゝ有ゝ人ハチウサハ中山ゝて琉球乃
いまゞ考ハゝ有ゝず、と云ゝ人、

鼠のあめ入

ゝ有ゝ冊子ゝ嵐のあハゝ
錦織ゝのこゝてたまゝ
の君ゝも云ゝより作ゝ
妹ゝすびゝ

と云ふも嵐をあとにふまへ、まさ季が仲秋の月といふ
俳書に、

月の嵐よあめ入すらやむとれ山

といふ句あり、二月はつきく滑稽の一話あり、萩生徂来ある人より
ゑるハ、ろくくより讀書をんをのそみ、わ清らを嘉紙のつき
たん書をよまざるといふもれ〳〵、おもて世よもれやといふとハ、
その人をして廣言いたれ〳〵ハ、その人ゑさ〳〵ぶ嵐のよめ人とふ冊子ふ、
乃具杓の宰領はつきくる杓の嵐れ名を棚返仲右ろうといふ名
あり、ゑることふも據れあるとよやと問ひくるをよ、さもじバとまそそ
どぶ嵐れ仲周が出世して呂狸より篇は、
鼠壽三百歳満百歳則色白善憑人而下名曰仲と

いふとあり、その杓嵐も年〳〵名をハ仲とよぶ、あり、とこ
〳〵れしふ、ある人もその杓識ふ服せしとや、

箱入娘　銭樹子

出壹隠者は今俗間は深窓ひうづく娘を箱入娘といい
ハ、ふとうあぐう、作元の翁ゑくや姫を竹れ中はるくうゑ、
とうぎう那〳〵、いと稚れバ箱は入色ゑ養ゑ、ゑり今の世は第
入娘ゑ、ふ是那ゑとあり、ものゑろ船来れ事物異名録をまく
たくゑ明皇雑録許子和偶家女能変新声臨幸謂其
母曰阿母銭樹子倒美といふとあり、一ゑ銭樹子ゑ、ゑ
とうぎふ金のある木ゑ、ゑ同じ、まさ娘を箱といふとふちろよ
ひくきこと、

竹簪

この竹簪ハ屋氏ヨ伝ふるところふるくこの家ハ女子享保年間やんごとなきあたりヨ宮仕せしころ拜領の物とゝ云ふ武書ホ云天正のころより今ヨ及びて昇平百二十年世俗の奢侈日ヨ月ホ長じて婦女の笄簪多くハ金銀をもつて造り玩物ヤ人形を遊ばせ金銀箔をもて飾るもありしかハ命をくだし禁止ありまた婦女の衣服髪器ニ至ル贅を用ひさセのゝしりとなるゝ笄簪の時代と符合す

柏餅

端午の日ホ柏ハ栗ヨ餅を包て互ヨ賜るもの〻ハ産のゝちて他の國ヨハきこえぬ風俗ホ〻〻又古き世よりのあるそしヨもあるべきよや、ものよりなることハ、徳元が俳諧初学抄ヨ五月の季ヨ入れ〻ハ、くれば寛永の頃ハ物のとも寛文年間ハものゝ地もたるも酒餅論と云冊子ヨ弥生ハ雛のあそびヨ〻〻ヨ曲ぎハ餅や端午ヨハ粽ヨ柏餅水無月ヨ氷餅素祥の餅ヨとゝあり延宝八年の印本不卜化の俳諧向之器ヨ柏餅の句ホ見ヘ、

餅ありなふ世人をこゝ玉ゝ　兼豊

押あゝ〻両華ゝ風やうゝたもち　水巴

延宝九年の印本言水紀の俳諧東日記に、

端午の御祝儀につく柏木の森冬枯ぞせむ　盲月

井樵は山や梢の四方はらし柏もち　兼豊

これらの句によりて此ものハ二百年よりあまねく節物となり
けんもしるべし、さて予ふと文化のころ西遊せしをりから
豊前の中津にて端午の日にあたりけるが、菝葜の葉に餅を
つゝみて家ごとにもてはやし、餅あき人も売れりこれが柏もちの名を称
ふるにつき問ひけるに、案ずるに地錦抄に菝葜ハ荊のるいなり、
葉丸く柿の葉のちいさき如くにて葉中に三の筋あり、冬
葉落て春出る、秋赤く実あり、俗にサンキライとも又ハサルトリ
バラともいふ非なり、されどもこれハ葉の形槲の葉に似たし花色

本ならん、花の色ハ一入ならずして形大きくありて各別の物なり
、又の名をもめづらしとものふれり、ちゞろ武州秩父の山中
へまかりしに農家客あるごとに小麦の粉を水にて練丸くち
ぎりて此かしハの葉を両あハせにしよりあて柏餅のごとくしてそくろ
くに焼てもちひとなし饗應しけるを葉をとれバ餅に三條の紋ぞ
えくあつらし移香あらしかとこうらへ尋ねけるにいとむつまじき物か
らんと翁らんしまゝに家の女あるじに是ハこゝの土地の名物にや、
此葉を用ゆる子細ありやと問ひ侍るに、老父言にまつらひ
て何の東華のれいなし是を亀甲餅といふ此葉をもめづらしと云ハ、
葉の形亀の甲に似たしまた齢を延る大事の菓子なりとて
いはひ食して長寿なしと伝ふと答ふ、されバこそ此ところの人は

その葉も捨がたしとハかゝる事にや、田舎人のいひすてに殊勝寺
ろ事なきにあれど、おもひ出れバ実にや萩葵ハ屠蘇の一味なれバ
長寿の縁にもなるべしやといふ。餅せ折人ハ西國浙佐の所に
茶にぬりあるる冊子に大隅の庁里子といひし五月五日ごとく粽
大かしく茶ざゝあるところに女ハ稲の葉にて黒米の餅を包
ミ作るハ一ツなん上ぐさに見しまゝるれ粽のうちなるべし。とある
るにぐみえるにても、江戸のこれにても名ひろく、などより木の
葉ハすぐなしとそのふてにいの詞なるバ、いづれの木にも葉
にもあれ餅つゝミたるんハうしハ餅と名へんも難かるべし、

牡丹餅　萩の花

ぼた餅ハ牡丹餅と書ルなり正字にて、このあんをつけたる餅を盆に
盛りなるべき形の牡丹花のごとくなれバこれをもて名を付そめし
なり。一名を夜舟といへり。その意ハいつ着しやらしらぬといふことなる
りといふ隠語なり。まさ園めずに著春めりく、その上に小豆のあ
んをつけたるを萩の花といふ。女詞にハおはぎといふ。これハ萩
の花に似たれハなり。下総の辺にてハ俗にこの餅といふ。おれハ餅
をつきてとさゝふやたらなるをもて、隣餅の訛れるなりとい
へり。

海苔

海苔の生なるを生海苔。湯で熬るを熬海苔。串にさして干
たるを串海苔といひ、奥州金華山の海辺にあるもの別品なり。
その干たるを金海苔とて世に賞美するもあり。又荒海苔と

いつ八一種あり、六俳園立路隨筆ニ大磯の駅ニて縁素寺と云
ちの門前ニ小牌をたてゝ子石と記し有り、形て足ニ彼
生海苔ニ似たる形の大石あり、表目帯ニ付て小き蔵
ニ卓ニのせ有り、弘藏の聖ニ此石持あげる人ニの名及故
の如くひゝと有りて何程力量を試るとて問ハ有りあゝ
此石を持ハ人ハ意の叶ハ有りとゝ人ハ世ニハ大
磯の虎石とゝなめりとあり、それハ今彼ニて大磯の遊女虎
石とゝひて猛人ニ成ハひゝと明り、

すをきと謂る

馬の丈四尺を立尺とゝ、れより あまりハ一すより三すまゝ
をスンとゝひ四すより七すまでをハすとゝ、キとゝひ又ハすよ

り九すまゝをスンとゝるより、今の馬乗人ハ、そハ、の比
より定まりゝ詞より、ハ幾すまてもあゝキとゝ
てゝ、雑和集ニ、

あふざろのすきまれ月のあるせハいくきの駒とゝで有まゝ

私ニ、馬ハ四尺を馬さけと云を、れ一すまさりたるをハ一きと
ハすまさりたるをハやきとゝふ有りと足ゝ、幸若の舞扇言鈔志
田ゝの詞ニ名馬のことをゝひてさんのへたちの有ゝあゝげ毛ハ
ゞんあけ白さいニひきよせやらゝとのゝゝ毛ゝとゝ、この毛き
ハゞんハ七すハ分有り、幾すまゝもキとゝることの證ゝすゞ、増ま
すをキとゝあるゝことハ古事記伝ニすを伎ゝふハ刻の意ハ有り、
万葉集ニ、玉刻春と伎ニ刻の字を書ゝるもその意ニて、伎と

いるぎキダキザムなどの本語なるべし、ある人ハすハ樹の省字なるべ
てその訓をそれるこのかぎりにあらず、漢土にも比例あり古語に鏡を
竟鑑を監に作るもあれまたあるいハ二説を併ふ、されど
鏡鑑の省文ハ別に論あれどこゝにそえるあれバそれ因に云銭の
ちゝ又ハ半をきるといふことハ美勘の訓にもまた又五ぶとも
いふ、そハ五分ハ一すの半なれバきるとハいふなり、寸半の約語な
るべし、再び半のこと、たゞ半ぶ五分なるバきるとめこゝにハいふ
うず、銭の径りハ寸半なると用元銭より出ぬ、なほ邦土同
じくまバかと又度まいでゝ本又の半を五分ともきるともいふこと
なるべし、

手綱染

鞦に筋を染ることを手綱染といひ世俗に小麻染ともいふ、こゝに
ハ取染といふが本名なり、諸書考用抄に手綱ハ浅染にて
ハ、まづ手綱の先を尺ばかり萌黄にそれあり一すゑ濃黄白萌
黄に横筋をつけ染ハ腹帯同前、また馬用書に浅手染
緋本色尺不言、五寸ばかり一色に染て又一すづつ濃に三ッばかり
いろ〳〵に染て又五すバかり一色に染るあり、色ハ何にても
なるべし、この染それの附軍陣のときあるべしハ不用ハ小笠原伝
前人の宗信伝ふり、まさに上覧抄に手綱ハもんにて筋を一す
まぶるにて付これを染といふとなるべし、それバかりの染と
いふを、手綱にその染を用ゆるにより、さく小麻染
といふ、嵐小六と云俳優の始なり常に二の染を専用ひさ

き、バ、ろ深を帯て小六帯とひあるゝ、石畳を市松といも佐の川市松ゞ好く用ひて故あり、拵に色は路考茶丈和抽の類、もて子俳優より出る、すべく物の名は仮摂八結訳くあるゝぬとも有り紛くとも少うゞ異八女子まゞきとあるを男めゝけあり いとれあき絹と切つゝ唐土は男毒といふ熟字あり遊山の字八業求まいで山は遊ぶとも勿論あるを舟遊山といふ一ニれも唐土は遊山船といふ文字あり

文七元結

元ゆひは文七元結とて上品の稱とゝ、仮就は、これ八切元結のまて ゝ八猫元結のゝ長きまゝ縮ね ゝる、浪華の侠士雁金文七といふもの書はさう場はまたいろ〳〵風詠あれバ書きて再び

ろ〳〵ぶれ勇を示せんとあ、元結をひ切るの死を決するとあるゝもゝ八切元結の短きを文七元結と人ゝ呼ぶとゝ、一ニ説ひゝとれゝ、業ずるは紫と本は仮のもて文七髪結とゝ名和の元結をゝらゝるゝ、文七とゝるゝゝ、仮ゝるゝ仮づれ名れバ、ゝ老人の和語は文七とゝ八元結はゝらゝる板糸紙の本のゝれゝとゝ、れゝ元結車はゝるゝと足ゝゝ、ゝ彼仮士の附会ゝゝふゝき名目ゝゝこの説を可とすゝ、

四十二の和爭

四十二の和爭とゝふ言ものゝゝけ冊子あり、そ八仮ゝるゝゝゝを題はて言をゝあるゝ、遠碧軒随筆は四十二年の禁忌の事書はは兄ゝ、雙六の采は目両公固まて四十二ありされゝ

四十二までハ重老衰微の争あり、これを過れハ法外の外にて何
事も足らずといふこともいふと云ふの俗説あり、是非なしといふ、
これまでおわらひの数を四十二とするをの拠あきらかならざ
り、

起請

徒然草に、起請文といふこと法曹にハその沙汰なし、いにしへの
聖代すべて起請文につきて行ふる政ハなきを、近代此事流
布したり、踏据に、起請文といふことをかくに盟誓をさして
て牛馬の血をすゝり其詞をしるして土にうづむ約するところを
し背かば此牛にもきゝ居らるゝ罪にあたらんと誓神に誓ふ
あり周礼左伝等にくはしくのせたり日本にてハ天照大神素戔

鳴尊と誓ひましませバ神代にもありける也、始ハ盟誓とい
ひしを人の代此事によりて白川院の御時も起請文といふ
をあまし貞永式目起請の裏書にありといへり、これにまじへバ
中むかしよりのならひとみえたるあるひハ慈恵僧正よりはじま
りともいへり、さて起請文に一枚起請二枚起請また七枚起請
百枚起請などいふ事もあり、義経記に土佐坊が七枚起請かきたるに
とみえ、後の世にかはらぬ室町殿日記豊臣朝鮮文書にも七枚
起請といふ事を見るより七枚起請の文をバよろしく友人より得て見
たり文明年間のころ書写するを写してあり七枚名文章別
あまた八誓言いく通りにもなしてあるものあり、其中のうちハ九
重のそハ一枚にうちその誓言の重きを幾枚にもしるして書

なるとく見えたり、源平盛衰記に百枚の起請といふ事もあり、駅
鞍橋に一枚起請二枚起請三枚起請といふ事も見えたり、これにて
法然上人の一枚起請といふもこれにて明らかなり、起請といふ文字
ハ後漢書劉盆子伝に其餘不知書者起請之とあるより
出たり、因に云起請文の前書に伊豆箱根の両社をしるすこと
ハ北条家盛なりし時のならはしにて関東にハ今にそのまゝ
沿襲して改めざるなりといへり、

無尽銭　たのもし

今無尽と称する講ありたのもしともいへり、無尽銭といふ名
目ハたのもし建武式目に見えたるをさしてたのもしといふハ田物代
の約語にて田実の義にて、一説にハむかしの國制に貧富強弱
を平等に配り合せて互に伍人組を立たのもしをもて出し
あひ村役人に預りおき貧民のあれハ租なく貸れて進退に
迫るときハその銭を役人より出しあたへ一郷一村の中を結合せ
互ひに富有なるものハ一生涯にその田地をしも取られし年
て賄へることゝなせり、是上古の貸税の制度の遺れるなる
べし貸税のことハ書紀の天武紀の詔に見えたり、

貸税

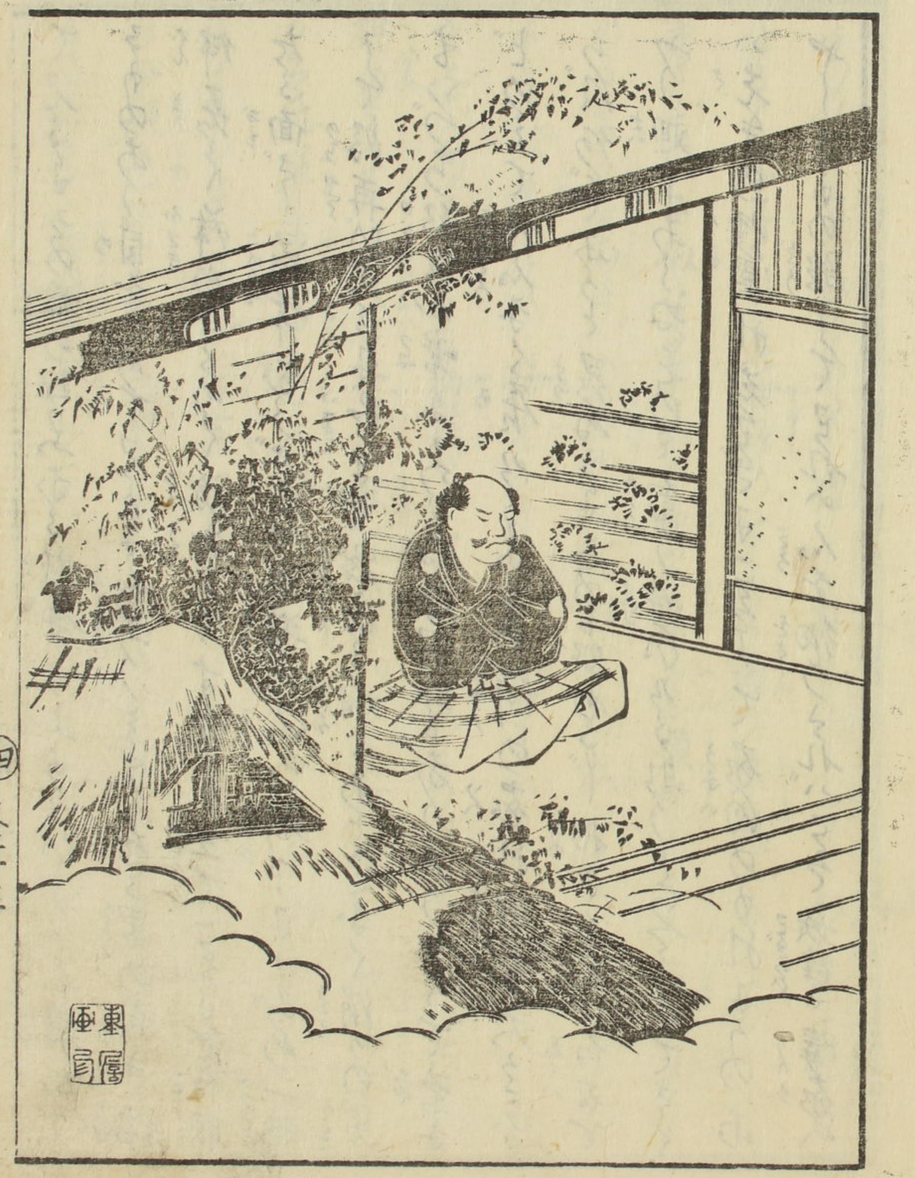
祖税といふハ今の年貢のことなり、古語にちからといふ賦役令
の義解に凡官稲之源出自田租而分為三一曰大
税二曰救穀三曰郡稲也、この税ハ一國にて貯へおくことに
て、たとへバ十五万束の稲を民に割つけて貸、その元を大

祝といひく毎年より不動おくゑ、さて貸たる利を五とゝ糸
へ上る故の名れ、右の方祝を田力といふ、者百姓のゆりく
田を耕す力とするよゝ有りと、祝詞考より、

通り悪魔は怪異

世より狂気するものをゑるより大ゑハ妄盛れとゆ人を苦し
め一日も安き思ひなくてゑゑゝより胸よせまりんぐれて狂
ひさハゑる有りされハ男ゑるめゆ先ハかきたづのとまく婦
人より人おゑるを狂り者れども男女ゑゑぎゝず何事も
かきふゆと狂気しく人をも殺しゑれも自害をすゝこ
とありをかつゆ人のゆりをさめよゝゝゑゑざる人の我と
破れをとるふ事るゆ有りゑれハ養生ハ薬治よりゑず

平生の人げあゝぶゝこゝろを養ふとまゆ有ぶゝゝゑの人を
狂気するハ何とかきふ怪きとの見よさぎゑるとありく
ゑれより地ぐろき魂をゑゝれ故ゆ人のゑゝゑる有り俗より通
り悪魔よあふといふこと有り俗竟変を多人の古語むか
しゝゝ不正の邪気より犯さゑる有りこハ常より人ゆ有ぶき
とありむり川井某と云ゑ武家ある射者番ようゑゝ日ぐ
屋宵ゆく上下衣服を着人て坐ゆつき座ゆをかゆめみさ
ゆゝより掾さきかゑるきゆ辛のりとゆある業業の生ゑゝゑ
ゑる中より猫者ゝとゆめゑる三尺ゑゝゑの烟りさんより立の
ぐゑをいぶゝゝゝ必ひ人つきて家をよび刀脇指を次ゝゑ
のけさせんゆ有きゝく夜着とゝよせてお臥気を待ち


東屋画

てゐるその櫛のむろふかる板屏の上よりひらりと飛ありるものあり見をとめて見るまゝ翠ふりこぶたる男の白き繻袢着るく拜のきるめく旅おろすくと立てこるをを白眼たる面ざし尋常あるざるやを拾もんを脇下ましづめ一瞥して浮再び見るまゝまで燃る燭もあとるかく消うの男もゾウち彩々んに常ふるるる虎の毋あり々りて菓子どのて何人をく虎ふるの隣の家れ強勢大るさからで何ごとみると尋ぬるまるの家あるで抱まるひ白丑をかり廻しあるぬるものと制り呼び々るとのるまてさくハ先きの怪異れ去るぎまこるて家ののれまうのあやしきもの語して見れハんを細うれバるて妖孽陳家へ

ろうてるの家のあるで怪しく怒るきしんより邪気を犯れるるとるるれこれ世俗のいはゆる通り悪魔とゆふあのとゆうまるこれは似るとあり四谷の名類焼あるる附をるす める栗の妻あるでの留守ふて附ハるる秋のあるさもまぎつよるれバ見ひるり掾先きるるたゞこのるつタゞれのりしきを多ゞあるるるる焼好といひるゞのり住居あれバ大るさ礎のるるて茅生るゞり狀風のさゞしと地るしるく吹まるしゞるれ草茅の中を白髪の老人腰ふるふまるゞまりて枝ますゞるよるひるる笑ひるゞるこるさは茅るやるれたゞを ら毋顔色まてるのあやしさもんるくれしるの妻女人のあるるのまて両眼を閉ぢこふるゞんのるゞれしあんとて妻の

品を唱へて人を惑はす事葉のまぎれ〳〵のくいまくるも月小さえぎるものさまゝよりあるを見ては
里〳〵ふこゝろ彩もなるべつてる医師の妻俄に狂気しるしとへ
つゝこれも世まぎれ類ひの怪異あるべしむかしより妖人よ
里おこるとゝふを知るべあるべしや妖巣云陽五行の気の
中附て流行する八天地の正理よりて不正なれどもその気両
間に滞敷紛授してつゝと多く風寒暑湿をなすはハ自
不正の気もあるべく人に感ずるよりてあるべきされば天
地の間に正気をもつゝ感ずれハ正気在り邪気をもつて
感ずれハ邪気在りと云命を失ふ
者〳〵ともよりあるべ〳〵

能書不擇筆

能書不擇筆とゝふ諺ハ李笠翁東同学書に見えたり
の著記にあり、この頃唐書をよめるに改陽詢伝に褚遂良
亦以書自名、常向虞世南曰、吾書孰与詢、答曰吾間
詢不擇紙筆皆得如走君豈得此、また裴行儉伝に、
行儉常向褚遂良非精著佳墨不擇著墨
而妍捷者余与虞世南耳とあり元即能書著を擇ま
ずとゝふに同じ、また揚升菴外集に、白浣沙女詩、一雙
金履齒兩足白如霜又越女詞云履上足如霜不著
鴉頭襪又云東陽素足女再三張敞光戯答云左右
可謂能書不擇著矣聊記以餉一笑とゝ見えたり、考れ

されば古人云工其事をよくせんと欲る人は必まづ其器を利くす
とありて、已に晋の王羲之與謝安石及陵子復与君此章草
所得極不為而筆至悪殊不称意これは右軍乃能
書をもつて紙筆を撰まんとして佳を要する
ハ通論にあらず、

みゝず書

世人手の拙きを蚯蚓のやうにまがれるといふ、栄花物語に、姫
みゝず書にやせさせのみる、これはあての御めのとにまへんとのさ
まをまゐらするにつけても、かうきなげにやつけましとおぼし御覧ぜら
るとあり、又信明集云返事にみゝず書してといふ、これは
こひしきにまどひたる手をまうでてそのさかしらにもみえれどもあるなる

とかきたるは、その文字筆力なく蚯蚓の蟠れるをいふにて、これ
邦のみならず、もろこしにても見えたり、續書譜に草體をなす
る條に唐太宗云行〻若縈春蚓字〻如綰秋蛇悪無
骨也とあり、又陸放翁の喜小兒輩到行在詩に阿綱学
書蚓満幅阿繪学語鶯囀木ともみえたり、

和哥に印を押

兼好法師が自筆の三社の和歌といふもの有り、その哥
は、まもるらん心をまもる男山さかゆくことのあらんかぎりは
五十鈴川おなじ流れの末も絶せじなたえぬ水にやどる月
むかしより跡たれそめしみかさ山袖もよろしき神風
この哥のはしさきに兼好といふ篆書の印あり、それは今のはじめ

しきりめよりあらざるべし、さて初学は印刷をはあるまじくぞ
のみならず小照高院道見親王の行の画は初学をうせもひ
て仏名経などに印ありをたしとあり、これは画賛を
也、例は初学ばかりなり、後鳥羽光廣卿の家は　光廣卿印
三角なる朱印を押たるが浪華の雑候場なるべ　正
る魚屋某の蔵はあるいと買山翁なるべし、

懸鈎　引墨

初学は懸鈎を加懸とてそのあらきかの懸
鈎をかけるとあり、まさに廻文散状などに領懸しくその書面
をえすをうるも加懸として句を懸ることなり、これをすべて懸
するとは古実は遠ざかるべし、古書を考やうは懸鈎と

引墨とは、さて懸鈎とは、その懸れるを翠簾の
鈎北ぐくは懸するをいう、山槐記執筆三勅文並申文
懸鈎揉　一、又説　一、可用何揉乎之由申相府之
處已両説也但以二三句知之可横翠簾鈎歟可用歟
揉之由有差、まさに達幸故実抄陣右筆は懸鈎揉事永
万元正廿一日切紙実抄懸鈎於書紙上文勅解由
大勅文了、資仲抄懸鈎揉如此也然而鈎離以無割目
為善、また懸鈎のやうを書べべ、まさに引墨
とは玉勝間は封書を書べきなり、とくとは北山抄は封
字のうらを代は忽引墨といふとあり、また引墨
書を引くとこれなり　製

学すれバ久しくして成むなり　良岡編

とを是の所論なれども又ハ三中口伝ハ引
墨甕の事也但非秘蔵事不書封ハ引墨也とも云
引墨とハ又ハ墨ハ多くの體也とを云ふ今公家方ハ
白紙ハ引紙を色ゝ染いろ〳〵を引墨あり或
人ハ唐書の中ハ鉛封とあり引墨のことなんと云ふ

苦学

古人苦学れをのかゝ困き枕ハ睡りをさまゝ〳〵戸を
閉ゝ人ハあぶさるの類ひあるひハ勤仕れ志ゞく活計のいとゞ
しきハいとうて枕をりく日ハ絶ぐ〳〵郷のいなゝ大学寮
れ書生ハ学文料をたまふれを燈油料と云ふ延喜式ハ

えゝ〳〵まゝ〳〵ゝ火れのゝとゝもいふと續世絶ぬ語ハあり
て書のゝどより枕ハ抱しづゝハこゝろおちゝく書ハもいを
ハたゝりハなれバ家人の無好結帥あゞすゝ〳〵ひゝゝ〳〵火の
をゝゝハ足ゝ世れ人を友とゝいひゝ〳〵晁無咎ゞ書燈
銘ハ、

武子聚螢孫生映雪雪固易消螢亦易滅惟此銀
缸不疲其光黄籠絲幕永夕煌〻経史在右子集
在左如或不勤負此燈火

揚升菴外集ハ足ゝ〳〵ゝ〳〵れども貧困ハセまゝ〳〵てハある
ひハ夜学ハ燈火のゝ多人ゝ多きハ及びくハ螢をあつめ雪ハ映ず
ゝふ至れゝゝそゝれたゞひ粉像をゝゝハあれ後進のゝれゝゝ

らず貧窶をりて学を廢することあれ、

壁を穿て書を讀

西京雜記に匡衡字稚圭勤学而無燭隣舍有燭而不逮衡乃穿壁引其光以書映光而讀之、

雪を映じて書を讀

孫氏世録に康家貧無油常映雪讀書、蒙求註引

螢をあつめて書を照す

晉書に車胤恭勤不倦博学多通家貧不常得油夏月則練囊盛數十螢火以照書以夜繼日焉、

糠を燃して書をよむ

南斉書に顧歡八歳誦孝経詩論及長篤志好学毋年老躬耕誦書夜則燃糠自照、

月の光を隠ひて書を讀

南斉書云江泌少貧晝日所傭夜讀書隨月光、

宋史に陸佃字農師越州山陰人居貧苦学夜無燈映月光讀書踵躡後師不遠千里過金陵受経於王安石、

薪を然して書をよむ

唐書に畢誠蛍孤夜然薪讀書毋卹其疲奪火使寐不肯息遂通經史工辭章、

木系を然して書を讀

唐書に柳璨字炤之公綽族孫也為人鄙猥其家不

以諸抑歩少孤貧好学晝採薪給費夜然藁照書彊記多所通渉

明世説新語云鄧智居龍泉菴貧無燈暑之給掃樹葉蓄之焚以照讀書達旦如是者三年遂成大儒

竈火を炊くに書を照す

天宝遺事云蘇頲少不得父意常与僕夫雑処而好学不倦每欲讀書又患無燈燭常於馬廐竈中旋火火光照書誦焉其苦学如此后至相位

天保十二年辛丑九歳秋分の日山崎美成しるす

世事百談巻之四

江都書林 下谷御成道 青雲堂英文藏板

小學本註	二冊	增補文語碎金	二冊	八面鋒	四冊
扶桑蒙求	三冊	宋名家詩選	二冊	晩唐百家絶句	五冊
題画詩類鈔	二冊	香籤集	一冊	和歌題百絶	一冊
三大家絶句	一冊	蜀山先生詩集	一冊	東征稿 西上紀	二冊
漫遊文草	五冊	昔々春秋	一冊	酒中趣	二冊
左傳凡例考	一冊	左傳比事	一冊	歳華一枝	一冊
歳華一枝拾遺	一冊	名乗字引	一冊	名乗字彙	一冊
略註五經字引	一冊	篆書字引	一冊	易學小筌	一冊
書家必用	一冊	書家錦嚢	一冊	書家便覧	一冊

古韻通叶　一折

醫書之部

治痘要方補遺　一冊
治痘論　一冊
治痘要論　一冊
痘疹戒草　三冊
痘疹養生訣　一冊
苑殤食物考　一折
治痘要訣　一冊
續痘科辨要　三冊
種痘辨義　一冊
保嬰須知　二冊
方函　二冊
日養食鑑　一冊

雜書之部

翁問答　四冊
三省錄　五冊
世事百談　四冊
瓦礫雜考　二冊
東江小倉百首　一冊
子昂真草千字文
子昂龍興寺碑
隸書粹翁亭記
蘭竹画譜　一冊
竹沙小品　一帖
光琳百圖　一冊

光琳百圖 後編　二冊
画圖撰要　三冊
一蝶画譜　三冊
蕙齋略画　二冊
刀劔圖考　一冊
刀劔圖考 二篇　一冊
裝劔備考　一冊
鞍鐙圖式　一冊
甲冑著用辨　二冊
貞丈家訓　一冊
田畑調法記　二冊
百姓袋　一冊
按正孔方圖鑑　一冊
珍錢奇品圖錄　一冊
古錢鑑　一冊
佛鬼軍 一休　一冊
三界一心記　一冊
日蓮御一代記　一冊
善惡種蒔和讃
八部秘講釋　一冊
暦日講釋　一冊

歌書之部

貫之集類題　二冊
香川景樹集 桂の落葉　二冊
海野遊翁歌 柳園家集　二冊
千町拔穂　一冊
園圃拔菜　二冊
萬葉用字格　一冊

靈能一貫　二冊
蜀山百首　一冊
俳諧之部
續故人五百題　二冊
新、五百題　二冊
近世五百題　二冊
過日庵撰
近世十家類題　二冊
十萬發句集　四冊
發句古今撰　二冊
俳諧寂寥　二冊

源氏物語系圖一折　二冊
手枕岡持狂歌狂文
仮名類纂　一冊
竹村茂枝集
穂向屋集　三冊
掌中故人五百題　一冊
嘉永五百題　二冊
近世五百題　二冊
白雄坊五百題　二冊
名所千題集　三冊
乙二發句集　二冊
過日庵輯
蒼虬翁句集　二冊
饒舌錄　二冊

新五百題　二冊
今人五百題　三篇四冊
過日庵撰
今人百家類題　二冊
題林發句集　四冊
曉臺七部集　二冊
今人發句集　二冊
過日庵撰
名家類題　四冊

一葉集　芭蕉翁一代集　五冊
一葉集　後篇　翁之文消息　四冊
俳諧集草　十六冊
俳諧四季草　四冊
安政五百題　二冊
過日庵撰
類題金玉集　四冊
風俗文選拾遺　二冊
梅澤先生手本向
庭訓往来　一冊
風月往来　一冊
千字文　一冊
消息詞　一冊
庭梅帖　一冊
御成敗式目　一冊
女今川　一冊
女推俗要文　一冊
新三十六歌仙　一帖
雪後帖　石摺　一帖
新撰詩歌合　一冊
續撰朗詠集　二冊
實語教童子教　一冊
諸流手本向
同真名序　一帖
尊朝瀟湘景　一冊
大槁庭訓往来　一冊

大槁新年帖　一冊　橘正敬庭訓　一冊　正敬商賈往来　一冊
蓮池堂法帖　一帖　瀧本芳野道の記　一冊　瀧本鴻書帖　一冊

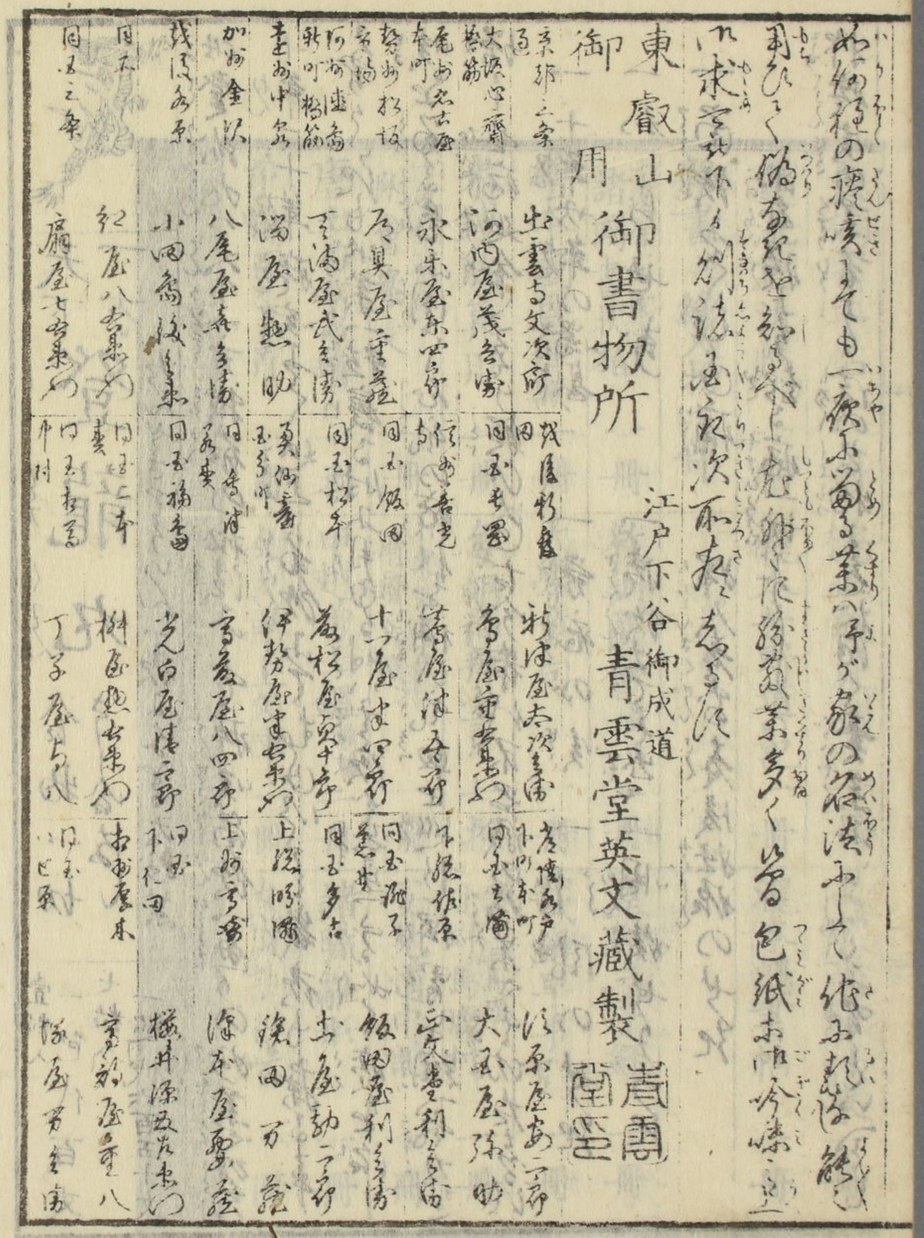
雜書并繪入物之部

十返舍一九著文
諸國書状指　一冊　教訓圖會前後　二冊　皇朝三字經　一冊
繪本國恩便談　一冊　大學笑句　一冊　裁縫早手引　一冊
米錢胸算用　一冊　毎朝神拜小言　一折　式亭三馬作　小野馬麻村　一冊
十返舍一九作　附會案文　一冊　山東京傳作　滑稽文選　一冊　安見道中記　一冊
唐土名所の繪　一枚　甲越勇士鑑前後　二冊　諸職雜形　一冊
花鶴百人一首　一冊　女大學正文庫　一冊　女庭訓往來　一冊

天下一方登龍丸　合物一切　さ合ま

壹粒入一包代百文
七粒入一巡代六百五十文

此登龍丸は天下一方我家の秘法にて疾病の妙薬なり
十年二十年疾病久しくなりて難儀なる者
あり此丸にて一粒寢る時小用もよるとき
喉乾き苦しく心気の疾しを補ひ気血を巡し
增し疾病延命ならしめ難ひなを古今希代不思議の妙薬なり
一十年廿年の腫物　一労症の疾　一風の世紀
一かしら世表　一痰飲はてを出す　一閉塞せずつ紀
一面腫ふくもの痛　一婦人産後の産後妊娠の世紀
此外疾たり難る病一切
抑疾病の業者より法の出物なれば薬業不可有といへども



天保十四年癸卯十二月

山嵜久作著

大坂心齋橋通北久太郎町

發行

書林

同 博労町 河内屋喜兵衛
同 安堂寺町 河内屋茂兵衛
同 順慶町 秋田屋太右衛門
同心斎橋南二町目 柏原屋清右衛門
江戸両國米沢町二町目 敦賀屋九兵衛
同 下谷御成道 釜屋又兵衛
英屋文藏板元